

## やまがら

米国スリーマイル島原子力発電所において、2019年から稼働が停止されていた1号機の再稼働が決定された。この決定は、AI開発を推進するマイクロソフト社への電力供給を目的とするもので、AIの活用の際に必要となるスーパーコンピュータの電力消費が莫大なものであることから、835メガワットに及ぶ全発電量を20年間にわたり同社へ供給する計画だという。

AI開発の際には、風力・太陽光等のクリーンエネルギーでは供給量を満たすことはできないが、一方で同社は、SDGsに関する取組に高い関心を寄せ、目標達成に尽力する企業であることをPRしているため、化石燃料による発電は避ける必要があることから原子力発電を選択したのだそう。

スリーマイル島原子力発電所は、1979年に原子力事故を起こしている。その後、1986年にはソ連のチェルノブイリで、そして2011年には日本において、東京電力福島第一原子力発電所で事故が発生し、いずれの事故も、現在にいたる深刻な影響を残している。

こうした中で、国は2021年にデジタル庁を新設し「未来志向のDXを大胆に推進し、デジタル時代の官民のインフラを一气呵成に作り上げることをめざす」としている。

東日本大震災から、我々はなにを学んだのだろうか。

その後も、繰り返し発生する大規模震災等のたびに各地の原発の状況が報道されるのは、原発が危険をはらむものであるからなのではないのだろうか。

DX化は、その基盤となるディープラーニング（深層学習）のために、従来の10倍にも及ぶ電力消費が必要であり、莫大で安定的な電力供給によって実現されるといわれているが、省エネルギー化の必要性はなくなったのだろうか。

AI導入の便利さや快適性を謳うCMでは、「美味しいハンバーグの作り方」「空港での時間つぶしの仕方」「おしゃれなコーディネート」「映える写真の編集方法」等々が頻繁に流されているが、こうしたことを知るために原発再稼働もやむなしとするのだろうか。

現在の我々には、個人の価値観に基づく選択の余地すら与えられていない。スマホやパソコンを開くと、特別な契約を取り交わしたわけでもないのに、AIが生成した情報が流れ込んでくる。

教育や研究の分野においても、AIを利用した不正等への対策を検討しなければならなくなっているほか、第一次産業分野でもAI導入にかかる経費の増大が懸念される。

従来、救うことの難しかった人命を守るなど、AIの活用期待が寄せられる局面も確かにあるのだろう。しかしなが

ら、深刻な環境破壊の原因となり、社会不安を増大させ、生きていくことに関するコストを高めるAIの活用は限定的であるべきなのではないだろうか。

我々の分野においても「林業のICT化」「森林クラウド」などを通じた「スマート林業」が窮地を救う救世主であるかのように喧伝されるが、熟慮を要する事態として捉える必要があるのではないだろうか。

2024年12月現在、日本国内の原子力発電所は、運転中のものが8か所（12基）、停止中が11か所（21基）、廃止措置中が12か所（20基）、廃止済み1か所（6基）、建設中3か所（3基）となっている（原子力規制委員会）。

社会の省エネルギー化に逆行し、原発が稼働することによって支えられる林業を是とするのか否か。

（時代遅れ）

## スマート林業